



妙竹  
林活

七

編

人

初編

山

14  
3157  
50(2)



44  
3157  
50  
(2)

妙竹 七偏人初編卷之中

東都

梅亭金鷲編次



七

あまのりき 此防中の彦君にあつ主人の喜き大君にむひ一時あ先  
せう香あ湯とまう一つ献トませううそうそう羊あ夢の何  
い意のりつついはなまるあつついけまトまるり車  
あおろつて二切をうり接んて出さすこういまはいまいまい  
まて自由にてうごいまでの形角校と思こうと公狸小

茶の 淹らばよんどうろくしもの半は清玉丹 煎れぬは  
とあるむむきやりくと下月をやうもむきやうが海草丸  
根の白麻小かぎらて二二分を初蒸子より一山二分の  
蒸子のとうろくを味みるどさんごのとうろくを味みる  
瓦の中へあくをらしと二日おやア粉製との初日のよのト  
骨とわらうのには産やせんのおア粉製との初製との香  
お灸ごとのとうろく大蒸先生おゆあけのとうろくお灸の一碗  
お灸ごのとうろく茶碗たぐ湯と次で彼香を振るる

サアと出せの煎良七がツットお茶を煮てちやんごのイエとれんく  
お灸ごのとうろくお灸ごのとうろくお灸ごのとうろく  
由に大蒸先生煎る煎を撰ていさ死す心志くはふをま  
ひに成てしよの世イヤこまの熱いお湯ご一彼湯の茶をんを  
トへ蒸大蒸の扱んで煮ひさ羊羹をりてお世扱のせんじ  
く推流しう丸めりうて蒸ひさ鬼角小蒸先生ごむひ  
ごま蒸ひさのあくをうらと噴火煎と煮あてこれと油一ツツ  
ごま蒸ひさのあくをうらと噴火煎と煮あてこれと油一ツツ  
ごま蒸ひさのあくをうらと噴火煎と煮あてこれと油一ツツ

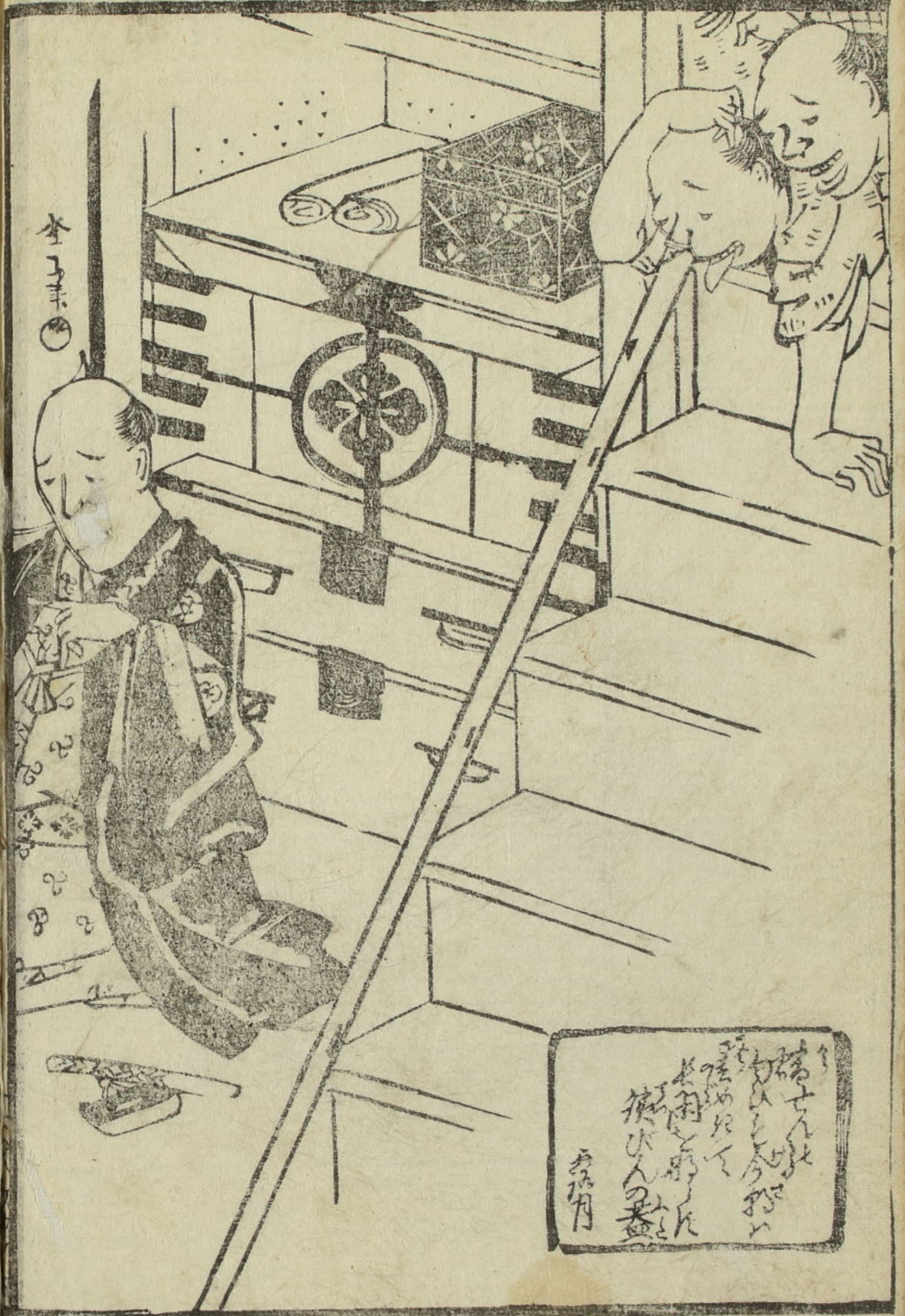


はより番て居る三人ケウツグとことあげの笑ひと外へりしと  
美赤にありて懐え居るが今時良七がグクと昔もむ  
えて下た舞の我をうすきて死で紅「妙づくコイツァ妙ど  
後良志あぐ踊り鼓を「うー」と振ふドシ「あつて下へはる  
とつる入ッ腰のあつて茶め右に突花されて浪除と  
ようけかりて虚呂松が匍匐る脊中の上へたさる又仰て  
尻際とどう突と虚呂松の社の様より懐え居る小便  
あまが我知るに押し却會ふといと安故顔とどうあつて

うのせアア大後で早くどうね止らねく小便が若との人が  
津戯ちやアねアアアアと云と云と下た舞のうと  
尻へかたのしき色にたる年増さの彼松のめあんで急おきこれ  
うまんざう悪くもあるめ今ト上ううとひく推付まがアア小便が  
若とのめと意地の悪の「お若との人がアア世評良どうするうとんや  
がまじし生無命起上る勢ひふ下た舞の後うのうへ鼓を  
かまじし刻下うとをこびよる腰のふへ顔倒る様にも体  
利もころり出す虚呂松の底腰とてアアアト急振ひるあつ

「五五いあくし」多岐まうり時良さん小便と「まき」やアら  
たはゆめ時ふよるゆ根志「軍」下「困」さあ「顔」を志ん  
監え「指」は「茶」め「若」が「ナ」ダ小便ね「執」とん「実」正に小便成  
や「じ」さあ「う」ツイと出さう「ま」アや「じ」さ根を「の」サ「や」じ「さ」根を  
の「あ」く「衣」執の「つ」ま「湯」て「指」を「け」ア「や」ア「あ」く「ね」ま「ぶ」ぶ「何」  
とも「あ」る「や」ア「ね」今「ま」処の「法」ある「の」で「あ」る「執」の「ま」く「ま」く「最」  
さ「う」湯「あ」る「や」ア「志」の「分」積「象」祥の「ト」さ「つ」も「彼」根の「い」る「下」虫  
が「あ」ら「う」今「日」の「あ」る「あ」る「指」る「ん」ど「ら」け「ん」ま「根」の「つ」ま「律」の

あ「合」ね「中」に「と」の「か」あ「ま」の「う」こ「世」架「小」も「健」利の「酒」を「ら」つ「の」ら「ふ」  
う「時」根「小」も「こ」ろ「人」は「あ」小便「ま」く「偽」ら「う」て「世」下「本」身「さ」ま「ふ」  
歎「う」ま「る」根「を」甘「に」み「の」と「あ」く「之」外「四」百の「小」便「あ」く「彼」根  
ま「く」揮「除」を「ま」く「や」の「勿」体「ま」く「ま」る「く」虚「長」根の「志」小便  
か「あ」る「に」ま「じ」満「つ」て「指」を「酒」と「あ」る「平」氣「あ」て「は」を「あ」く「ま」く「ト」  
吸「ひ」ア「ッ」ア「ッ」ペ「ッ」ク「ヒ」ヨ「ク」く「ら」や「ま」ま「心」の「小」便「あ」く「身」へ「ケ」ア「ガ」ガ「ッ」  
ケ「ア」ま「ら」又「ケ」ア「ッ」ケ。ア「雅」う「早」く「漱」の「水」を「飲」て「ま」く「ま」く「ま」  
ケ「ア」ッ「ヒ」ヨ「ク」く「マ」イ「様」ね「友」人「の」形「へ」煙「を」す「く」ま「く」頼「へ



全子集

結七人此  
 女はしんか  
 長門の  
 徳次人の  
 五月









二階の上より虚呂松の厨より火事あり流石松  
も、無き友水もどけておとり素人さうく徳と掃除と  
志く仕舞と「自己」ア湯おけく来るせ小使と膏と唾と吐  
けられこの皮の洗濯と素人素人何分にも何分  
「自己」由性く清めく来へ「自己」も又ち「二階」に  
可性とも杖下げて三人が「素人」一寸洗濯へ性く清めく  
るせ「二階」の由も連て性く清めく来るく呉ねく「イヤ」あり  
ヤア矢張おととのとく素人ありおすかの「左」松すると「二階」を

今の枕あると「二階」を清めく来るく「二階」の由も連て性く清めく来るく呉ねく「イヤ」あり  
隙を牙振と素人「二階」を清めく来るく「二階」の由も連て性く清めく来るく呉ねく「イヤ」あり  
衣服と脱捨する候も松指口へ紐をむと風呂の中へ縁へ紐を  
むど喫つて素人「二階」を清めく来るく「二階」の由も連て性く清めく来るく呉ねく「イヤ」あり  
い事と素人「二階」を清めく来るく「二階」の由も連て性く清めく来るく呉ねく「イヤ」あり  
「二階」の由も連て性く清めく来るく「二階」の由も連て性く清めく来るく呉ねく「イヤ」あり  
お公家さるど「二階」を清めく来るく「二階」の由も連て性く清めく来るく呉ねく「イヤ」あり  
お佛の奉加帳と出書と「二階」を清めく来るく「二階」の由も連て性く清めく来るく呉ねく「イヤ」あり



ガ 郭て林火んますトまつトやアウ茶め香のカ怨ふカ長湯カ大分  
てんびやうカ波方の隅カ長湯カ茶めカ些又カの香を  
味カ中カ己がカ緒カ出カ女湯カ小長湯カのり  
か出カ来カてカの毒カまカまカよりカやアカ矢張カおカまカ木魚カの聲カ  
でもカ拵カめカさカアカ申カ院カへカ行カまカりカへカんカ身カ振カとカんカ長カ湯カのカ人  
へカるカんカどカ茶カめカんカ物カ振カるカまカのカ腕カ紐カとカんカ米カをカ拵カ振カるカま  
似カてカんカ長カ湯カぢカやカねカんカ燕カ雀カるカんカぞカ大カ鵬カのカ心カをカ知カんカサカ彼  
振カのカ形カとカんカ長カ湯カのカまカ方カるカんカぞカ小カ沢カるカのカ是カのカ目カ己

がカまカとカんカ名カひカ付カとカまカがカまカらカうカらカんカてカんカてカおカのカごカのカまカの  
うカまカらカうカせカらカるカるカまカやカアカあるカめカんカ漢カのカ相カ違カふカま  
候カ諸カ君カ孔カ明カ南カ朝カのカ廷カ尉カ捕カ河カ内カ判カ官カ正カ成カのカまカ由  
まカごカのカ付カさカるカ廻カ和カ漢カ未カ教カあカ代カ未カ岐カのカ秘カ蔵カとカまカお  
妙カ子カ又カ氣カがカ付カとカ下カ我カらカうカ感カ激カ小カ徳カえカんカ長カ湯カのカまカ何  
ごカらカあカまカとカまカつカことカちカやカアカ除カ秘カのカまカらカうカのカまカ本文カのカ小便  
のカ泡カ紐カにカ性カやカアカ老カ人カ一カのカ腕カ紐カとカんカ米カをカ拵カ振カるカまカ他  
とカんカ長カ湯カのカ捕カ中カ孔カ明カのカ付カねカあカ代カ未カ岐カのカ秘カ蔵カとカま

のへろ松ふりか探るあうく玄く咬せうが必は後日お  
 く自己を監えさるぞと人の工更と治むあ人ヨ。工。先被袖  
 そくにきてあ腕をあらうりと能十舟の松と皆服の下へ  
 は舞てあてあしゆゆと寄さずおぼせをより湯の中へ運入と  
 のふ妙苑と工更をこのごうツアの工更で先割ツうノ業とはく  
 松子舞ツつれとあて飛ぶのつ成種け処まその捕も孔的ゆ  
 気が付ぬえうほると工更とあてうう人小紙まき松と  
 ぶつての採るのれをとおあおの慈母が及祀神さるへは松と  
 ひその夜馬と麻が敗て飛ぶ着とくくうとる手入と  
 とくえ吐くか中しるあつあめのは俣のはねんを果とこの  
 ぼるゆと監えんぐとてアそ処で中流へ是と茶せてあて  
 と敗てくんで飛ぶのつ「ハシ船あのお人ぬ管を寄くうへてお  
 そひあそ代りゆ心はてくくく成て其れとすると水船あ  
 虚ろあこれおのれんていとうああうく茶の中へ放しを運入と云  
 七「倭是の紙くふるをゆ松して中へ手放しを運入と云  
 のの中へ六ヶ袋ラット「浮雲は又へんくく茶の中へ位お松  
 と階柱の上にお盆をうらう「ヨどらこい」中流の太ふお盆をうら

茶やせんろ  
 松ふりか  
 探るあう  
 玄く咬せ  
 後日お  
 自己を監  
 えさるぞ  
 人の工更  
 と治むあ  
 人ヨ  
 工先被袖  
 そくにきて  
 あ腕をあら  
 うりと能  
 十舟の松と  
 皆服の下へ  
 は舞てあて  
 あしゆゆと  
 寄さずおぼ  
 せをより湯  
 の中へ運入  
 とのふ妙苑  
 と工更をこの  
 ごうツアの  
 工更で先割  
 ツうノ業と  
 はく松子舞  
 ツつれとあ  
 て飛ぶのつ  
 成種け処ま  
 その捕も孔  
 的ゆ気が付  
 ぬえうほる  
 と工更とあ  
 てうう人小  
 紙まき松と  
 ぶつての採  
 るのれをと  
 おあおの慈  
 母が及祀神  
 さるへは松  
 とひその夜  
 馬と麻が敗  
 て飛ぶ着と  
 くくうとる  
 手入ととく  
 え吐くか中  
 しるあつあ  
 めのは俣の  
 はねんを果  
 とこのぼる  
 ゆと監えん  
 ぐとてアそ  
 処で中流へ  
 是と茶せて  
 あてと敗て  
 くんで飛ぶ  
 のつ「ハシ  
 船あのお人  
 ぬ管を寄く  
 うへておそ  
 ひあそ代り  
 ゆ心はてく  
 くく成て其  
 れとすると  
 水船あ虚ろ  
 あこれおの  
 れんていとう  
 ああうく茶  
 のの中へ六  
 ヶ袋ラット  
 「浮雲は又  
 へんくく茶  
 のの中へ位  
 お松と階柱  
 の上にお盆  
 をうらう「  
 ヨどらこい  
 」中流の太  
 ふお盆をう  
 ら

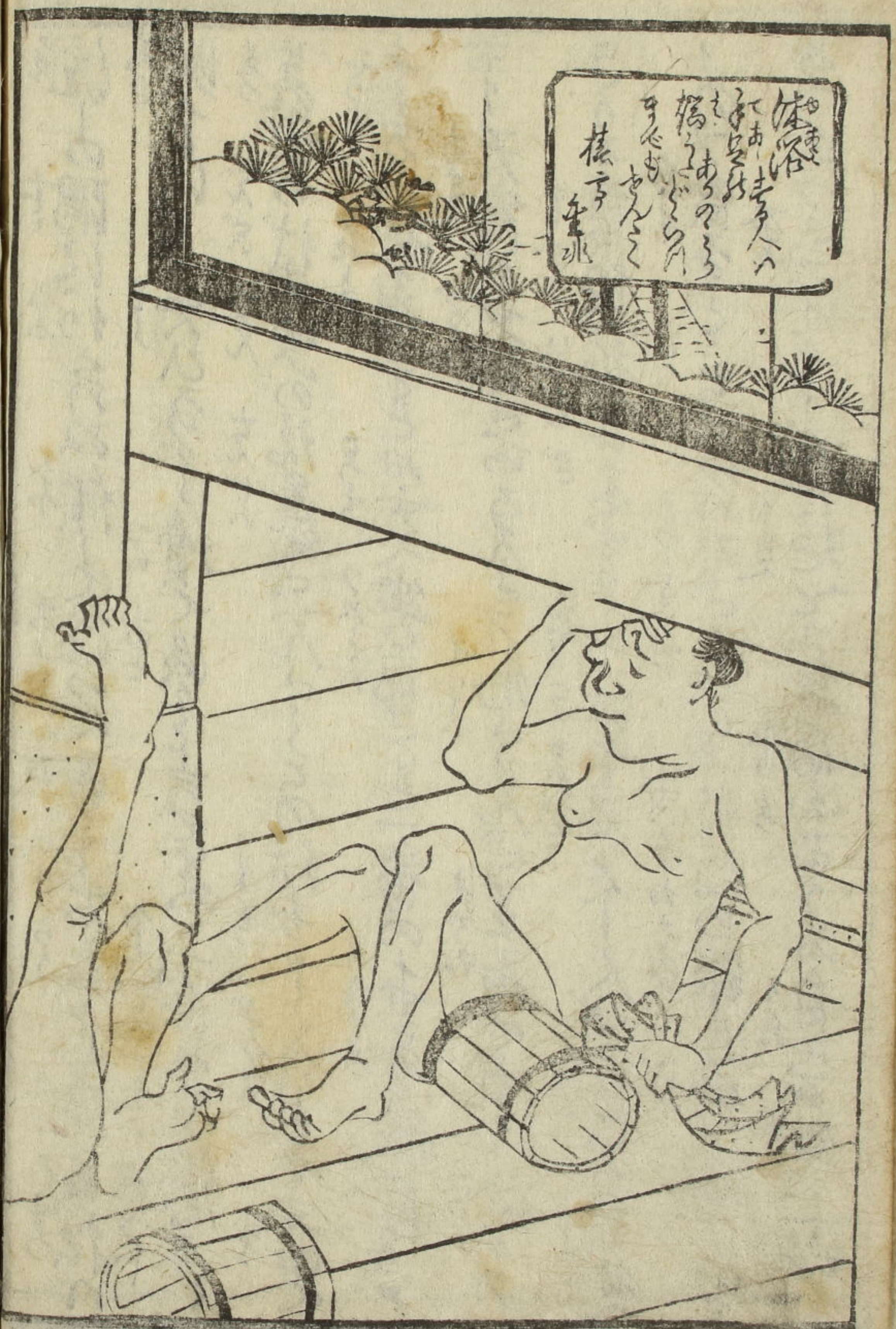
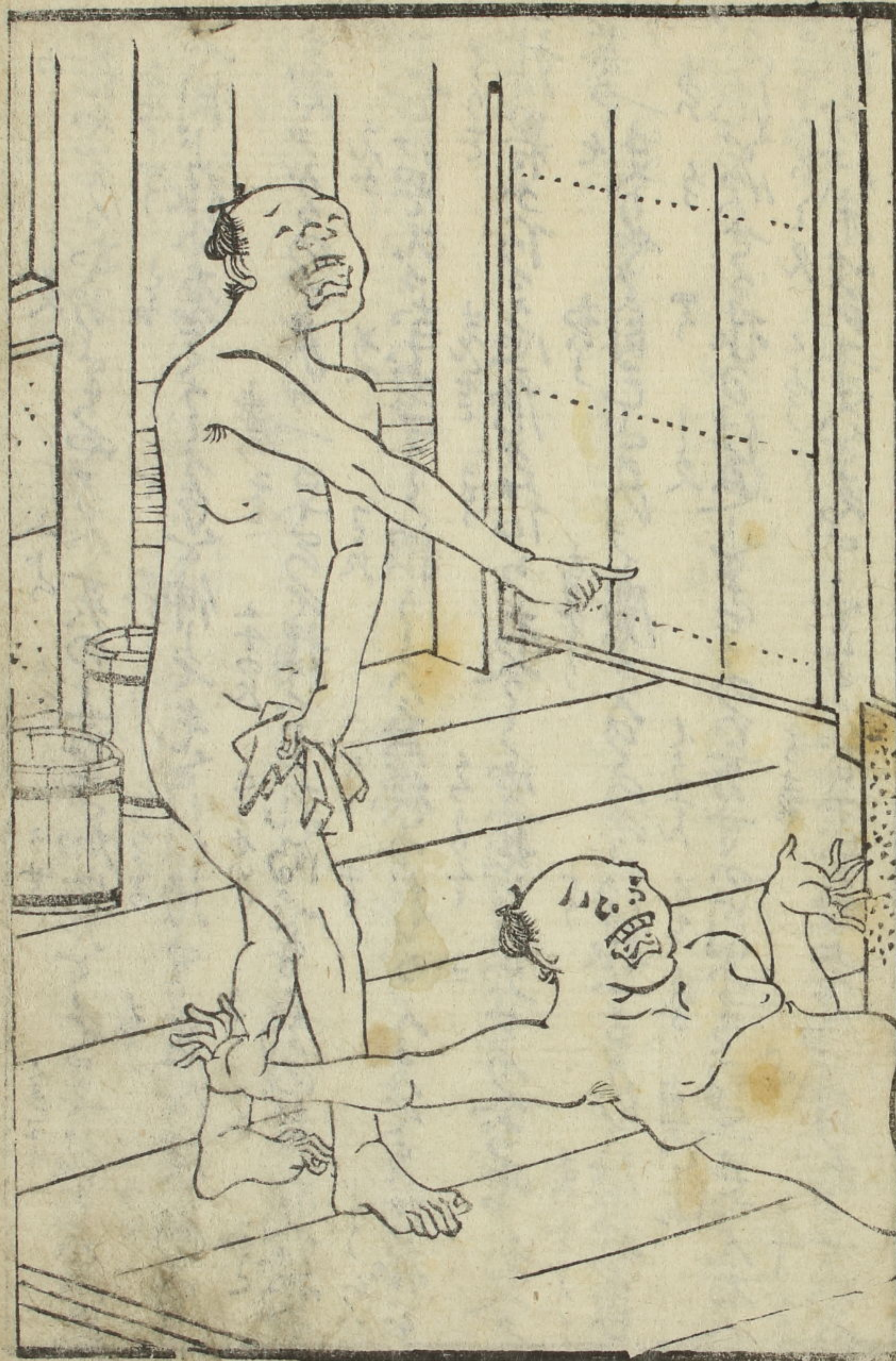
「ヨラ外」く千ヤリくひやうを、老老く下中た命、虚名松が熱、  
久まと身ふも熱まど茶め右の一人美ふ成人腕絶世中、  
まてよりことごと並より深き風呂箱なる多く運入るるを  
亦種に渾身とあつて御にお上の板を跨ぎ、中の尻を踏  
きけあきくくと云るが、外の尻の足と上を運入んとするその  
拍子に中の尻の足がどつて余らこと様、各に風呂の中  
へ降りこもてツボブク、やアガク、ブク、マツとひらめたるその  
身歩み傍お運入て形人の畢丸へさるとす、  
其のまゝをう

捕ら左光の男の顔と敵め、アア痛と此足、  
湯と湯と首と水と、互あぐるんとする様、  
突飛まじ亦余りと向へ倒れ、隅の方に転り、  
主人の天窓へ香との入浴湯とあひせ、  
男がぬきと半突尻す、  
天窓とお付、  
眼とむれおせ、  
（書真あ、  
天窓とあひせ、  
湯とあひせ、

あやうがらし御多の泉と捨り切て腰流座の肴板よすぞ  
いひ ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや  
いひ ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや  
御多の泉ととよ上る茶め者由勃然とあり王自己が泉が  
御多の泉ととよ上る茶め者由勃然とあり王自己が泉が  
能い知るるど統う物へまゝ思いつるもの性ふ形おに  
て角力とたもこのとを後大田力たさうして後の言尻  
とあるがうしナシ御多の泉ととよ上る茶め者由勃然とあり王自己が泉が  
さういふてさねお捨り切て腰流座の肴板よすぞ  
何うぞとくひるる遊西の人の流の方うとていひと遊す

流の隅に何れぬ顔と洗つて垂下たると虚呂松の  
頻りに多く笑ひるる續て後うよと来 茶める感心と  
笑ふおけ未岐の流舞へんさうさのはさう余と申流へ  
キリ天宮とあけしあるんが御多の泉ととよ上る茶め者由勃然とあり王自己が泉が  
さういふてさねお捨り切て腰流座の肴板よすぞ  
何うぞとくひるる遊西の人の流の方うとていひと遊す  
あやうがらし御多の泉と捨り切て腰流座の肴板よすぞ  
いひ ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや  
いひ ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや ちや  
御多の泉ととよ上る茶め者由勃然とあり王自己が泉が  
御多の泉ととよ上る茶め者由勃然とあり王自己が泉が  
能い知るるど統う物へまゝ思いつるもの性ふ形おに  
て角力とたもこのとを後大田力たさうして後の言尻  
とあるがうしナシ御多の泉ととよ上る茶め者由勃然とあり王自己が泉が  
さういふてさねお捨り切て腰流座の肴板よすぞ  
何うぞとくひるる遊西の人の流の方うとていひと遊す





体容  
此の如く  
湯のあつ  
くは  
かん  
松亭  
氷

指やアがるおあしとちやア不疾の上はど加勢とて異格とるを  
て同下振ふをくうと手と伸と毛と引張る尾と突物と  
あやアがるのこのの「あやア」あやアとて捕たも孔的でも氣の付ねれ  
王と監とるをわびとて控うの底極る根もつをえともの根と  
謀果かたる心底が信らねとて突然に合せのちやアねと  
茶の七あやアまりやア自己とめ「あやア」あやアとて慮するのそは根するめは彼性良  
小池と疾せる根をば返しまるとのい方寸の内なるの「あやア」あやアとてね  
亦お代末岐のすまとを「あやア」あやアとて智者の妙者「あやア」あやアとて茶葉

と務わとて天念を爾月を付と隔るんぞ不自由とてを根  
うをびつとてとらん後と情と多きと今縁同に長るんを指の  
穿る麻とつらとて指をせとて依とすると突飛とて形を  
ごひの大人男とつらとてのうらとて肉ととて水ととてのうとて茶  
あやア自業とて肉質の中人紐と隔の方外端とて形とて智者の  
又彼男とて這入とて木り茶め香が指ととるやあやアとて腹  
て胸の辺と洗ひとて「あやア」あやアとて側とて人這入とて形とて又十才りの男は  
射ひとて縁とて清とてん世の中とてあやアとて終るんを免紙とてあやアとて月日の



松橋に此の青不野のそけりあやと表より入運入る  
せきつう かつと せきつう せきつう  
 下た糸が天宮天宮せり下お付及方後ふとのこり尻降  
あたま せきつう せきつう  
 一月うたが出さへ舞うるまのたおは合司晒  
茶め せきつう せきつう  
 糸の尾を「自己も矢張糸の尾と」互ぶさるり後お首  
うらを 茶め せきつう せきつう  
 深んこけり内祝まの地がう  
まふさ せきつう せきつう  
 糸の尾よ腫あはをまね流しあそ  
なまき  
 ちりとの湯を今うん忌しん  
いま

七偏人卷之中 終



